

## 「レッド・ガーランドの魅力について～裏街道～」

紅 我蘭堂

### 【はじめに】

これまで様々な場所と形体でレッド・ガーランドの魅力を紹介させていただきました。

本日もまた、訳もわからず、よく調べもせずにパアパアと書きたいことを書き、言いたいことを言います。どうか酔っぱらいの戯れ言と聞き流して下さい。

さて物事には必ず表裏があります。皆さんの大好きなLPレコードにはA面B面があります。A・BがないのがCDです。東海道の裏街道は大山街道(現・国道246号線)、甲州街道の裏街道は青梅街道(国道411号線)、中山道の裏街道は岩槻街道(国道122号線、一部日光奥州街道)というように必ず表には裏があります。

ピアノ・トリオの演奏はガーランドの表芸(表街道)です。《カクテル・ピアノ》※1とか《男一匹スピーカーに対峙するにあたわない》※2と蔑まれても、立派なガーランドの表芸です。

※1: ホテルのラウンジなどの演奏を生業にされている方々に対して、非常に失礼な表現であります。

※2: 数10年前に中央線沿線の某ジャズ喫茶店主が記述していた。

対して、私の持論ですがガーランドはホーン奏者との相性が非常に悪かったと常々話してきました。マイルス・デイビスにはこき使われ、マイルスの音楽傾向が変われば麻薬常習という理由で首を切られる。同じく麻薬仲間のコルトレーンとはクスリを買うためにせっせとレコーディングするけど、結局その狭い範囲でしか活動できず。挙句の果てに60年代の新しい傾向(ネオ・ハードバップ、ニューウェーブ等々)についていけなくてリタイアしてしまいました。

1957年にはPRESTIGEレコードでカーティス・フラー(tb)やフィル・ウッズ(as)のリーダー・アルバムに呼ばれてレコードを作りましたが、どうも噛み合わずに名盤・好盤の出来になっていません。(あくまでも個人の感想です)

マイルス・デイビス・クインテットで人気が出てポール・チェンバース(b)とフィリー・ジョー・ジョンズ(ds)とともに『オール・アメリカン・リズム・セクション』などとチャホヤされ、わざわざ西海岸まで呼ばれてアート・ペッパー(as)と共にレコードを制作したものの、結局は一発こつきりになってしまいました。

この理由を私なりに無い知恵を絞りだして以下の2点ではないかと考えつきました。

### 【ガーランドはモダン・ジャズではなくスイング・ジャズ】

敢えて偉そうなことを書かせていただきますが、モダン・ジャズ派と言われているガーランドの本質は『デューク・エリントンやカウント・ベイシーなどのスイング・ジャズ』であり、気持ちは『スイング・ジャズを好む保守派または伝統回帰のトラディショナル派』です。その証左はあります。

1950年代後半にオーネット・コールマン(as他)がフリージャズ・スタイルで登場した際に、マイルス・デイビスは理解を示したのに対してガーランドは「何をやっているのか、さっぱり解らん」と答えて、マイルスに「奴は何も解っちゃいない」と嘆かれました。

また本日お聴きいただくガーランドの『AT THE PRELUDE』というライブ盤でも、エリントンやベ

イシーが作曲した曲や好みの演奏曲を数多く採用しています。あろうことかベイシーの『ワン・オクロック・ジャンプ』という曲をステージのエンド曲(テーマ曲)にしています。

ガーランドの名盤『GROOVY』でおなじみの“C ジャム・ブルース”はエリントンの作曲です。

スイング派だのモダン派だのというカテゴリ一分けは後世の評論家と称する人々や売文屋などが勝手につけた名称であり、当のプレイヤーにとっては関係のないことです。

さらに言えば、この人は自分で作曲して新しい境地を作るということが苦手というか不可能でした。レコード・カタログのどこをどう探してみてもガーランド作曲で現代に引き継がれているという曲は見当たりません。レコードにガーランドのオリジナルとしてクレジットされている曲はすべて即興演奏でダラダラと紡ぎだしたアドリブ演奏です。2度と再演されたことは皆無だと思います。

この人は諸先輩の曲や歌曲・スタンダード曲などを自分なりに面白おかしく演奏することが生きがいだったと思います。なので、当時バリバリに新しい物好きなハード・バッパー達とは基本的に相いれない部分がありました。本日お聴きいただくコールマン・ホーキンス(ts)とは相性が良いように思います。またまた無いものねだりですが、かのエリントン楽団の至宝であるアルトサックスの名手達人ジョニー・ホッジスとの共演はいかばかりだったでしょうか。聴いてみたかった。私のリクエストはたくさんありますが特に『I THOUGHT ABOUT YOU』なんてね・・・・、ため息出るわ。

### 【ガーランドの地方訛り】

さらにもう一つ、ガーランドの節回しの訛りです。言葉にそれぞれの出身地の訛りが出るように、音楽にもその出身地方の訛りが、消しがたい癌のように浮かび上がります。敢えてガーランドのテキサス訛りと呼びますが、ニューヨークのブルックリン出身の若手、シカゴやデトロイト出身のジャズメンとは本質的に合わなかつたのだと思います。

その証左は、あの BLUE NOTE レコードのオーナー兼プロデューサーのアルフレッド・ライオンが本当にただの一度もガーランドを呼ばなかったことで全てを表しています。マイルス・クインティットのメンバーは大なり小なりリーダー・アルバムを作成してもらったり、レコーディング・セッションに名前を連ねています。ただひとりガーランドの名前だけは名門 BLUE NOTE レコードの膨大なカタログの中のどこをどう探しても見当たりません。ただ1枚だけ本日お聴きいただくチャーリー・パークーのレコードがありますが、これはどこからか掘り出してきたテープを東芝が発売するときに BLUE NOTE レコードのブランドを借用したものだと思います。

アルフレッド・ライオンはガーランドのテキサス訛りを好みませんでした。ライオンにとってはたくさんレコードを売りたいビジネスですが、趣味を兼ねているビジネスですので良い悪いではなく、好き嫌いがあつても、それはそれで結構なことです。私もガーランドとリー・モーガン(tp)やジョニー・グリフィン(ts)との共演レコードには“怖いもの聴きたさ”的興味はあります。が、前述のカーティス・フラーやフィル・ウッズとの共演盤が脳裏に浮かび、やっぱり合わないだろうなと一人で納得しています。

ではガーランドの「訛り」とは何かということですが、私も音楽の専門家ではないので理論的なことは説明できません。曲を聴いていて「あっ、ここだな」という感覚的な部分なのです。この人、マイルスやコルトレーンのバックなどで大人しくピアノをポロポロしている分には大変結構なのですが、トリオ演奏などでスロー・ブルースなどを演奏していると、時にエゲツないほど泥臭くグチョグチョになることがあります。そして自分の世界に閉じこもってしまい周囲が見えなくなってしまうタイプなのです。

うまく表現はできませんが、他のアフリカ系アメリカ人プレイヤーが身に着けているような“バタ臭さ”とひと味もふた味も異なる雰囲気を感じます。

ライオンと対照的にガーランドを好んだ人々は数多くいます。代表役は RIVERSIDE レコードのオリン・キープニュースであり、これも本日お聴きいただくレコードをライブ録音した『キーストーン・コーナー』のオーナーであったトッド・バルカンです。彼らはガーランドの表芸の他にも何か裏芸の魅力を見出したのかもしれません。そのホーン奏者との共演が、言ってみればガーランドの裏芸(裏街道)と言いたいのです。

私も高齢者の仲間入りして人間が枯れてきたせいか、たまに聴くホーン奏者とのレコードも「おやっ? なかなかいいじゃないか」と思うことがしばしばあります。

ダラダラと永く続いてきたこの『レッド・ガーランドの魅力について』もそろそろエンディングです。本日はガーランドの裏芸(裏街道)に迫ってみたいと思います。

また、本日は一人のファンの哀れさを笑ってやってください。惚れた弱みってやつでとんでもないレコードも掛けようと思います。もちろんピアノ・トリオもお聴きいただきます。

### CHARLIE PARKER AT STORYVILLE(BLUE NOTE 東芝 BNJ-71098)



CHARLIE PARKER(as), RED GARLAND(p),  
BERNIE GRIGGS(b), ROY HAYNES(ds) 1953年3月10日録音  
MOOSE THE MOOCHO  
I'LL WALK ALONE

長らくファン稼業をしていると、時たま腰が抜けそうになるレコードと巡り合います。このチャーリー・パークーのアルバムのピアニストがガーランドだと見た時は本当に何度もなんども目をコスりました。ガーランドとパークーの共演レコードなんて文字通り《ウソかデマか冗談》としか思えませんでした。勿論、即購入です。

内容は・・・、正直に言って私はガーランドの演奏は力強さがないバド・パウエルという印象を持ちました。事実ガーランドは一時パウエルに師事していたという伝説があります。

### THE ALL STARS "LIVE" EUROPEAN CONCERT(UNIQUE JAZZ UJ25)



RED GARLAND(p), ZOOT SIMS(ts), LEE KONITZ(as),  
OSCAR PETTIFORD(b), KENNY CLARKE(ds) 1958年録音  
YARDBIRD SUITE  
SUNDAY  
WILLOW WEEP FOR ME

ファンとは、つくづくと悲しいものです。海賊盤だか正規発売だか分からぬ。お目当てのプレイヤーがどういう演奏をしているか分からぬ。一度も内容を聴いたこともないのに、そのプレイヤーが入っているというレコード・ジャケットを見ただけで買ってしまうという悲しい性(さが)の1枚です。まず笑ってやってください。

でも音は悪いですがズート・シムスの柔らかな音色とガーランドの優しさがあふれている演奏に聴こえます。ああシムスって、やっぱりいいなあ。



### 1958 MILES/MILES DAVIS (CBS-SONY)

MILES DAVIS(tp), JOHN COLTRANE(ts), RED GARLAND(p),  
PAUL CHAMBERS(b), "PHILLY" JOE JONES(ds)

1958年3月4日録音

LITTLE MELONAE

1955年から続いてきた『マイルス・デイビス・クインテット』の最後半の演奏です。もちろん何もノーガキはいらないですね。



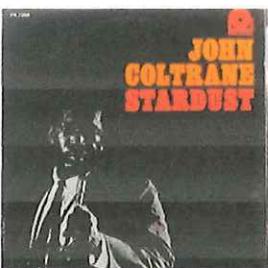
### COLEMAN HAWKINS WITH THE RED GARLAND TRIO (PRESTIGE 《SWING VILLE 2001》)

COLEMAN HAWKINS(ts), RED GARLAND(p), DOUG WATKINS(b), "SPECKS" WRIGHT(ds) 1959年8月12日録音

IT'S A BLUE WORLD

BEAN'S BLUES

ガーランドは前書きでお話ししているように、基本的にはモダン・ジャズというよりスイング・ジャズよりのプレイヤーです。さらにそこに気怠いブルース感覚を持っていました。コールマン・ホーキンスとの唯一の共演盤は何故かのびのびと演奏しています。もっと何枚か共演盤を残してほしかったです。



### STARDUST/JOHN COLTRANE (PRESTIGE PR-7268)

JOHN COLTRANE(ts), RED GARLAND(p),

PAUL CHAMBERS(b), JIMMY COBB(ds) 1958年12月26日録音

TIME AFTER TIME

1957年に麻薬のためにマイルス・デイビスから解雇されたガーランドとコルトレーンは、その後食べるためか麻薬の代金ほしさか不明ですが、57年5月から58年12月までPRESTIGEレコードにガーランドのリーダー名義で4枚、コルトレーンのリーダー名義で11枚のレコードを生み出しています。どれもハードバップのレコードとしては、まあまあの好盤ですが、この間のコルトレーンの進境ぶりとガーランドの頑固なまでのワンパターンぶりは興味があります。



### BAHIA/JOHN COLTRANE (PRESTIGE PR-7353)

JOHN COLTRANE(ts), WILBUR HARDIN(tp),

RED GARLAND(p), PAUL CHAMBERS(b), JIMMY COBB(ds)

1958年7月11日,12月26日録音

I'M A DREAMER ARENT WE ALL

SOMETHING I DREAMED LAST NIGHT 10:48

1958年になると、さすがにコルトレーンとガーランドの中もギクシャクというのでしょうか、コルトレーンが進みすぎていったという印象があります。そのよい例がこの「I'M A DREAMER ARENT WE ALL」の演奏です。



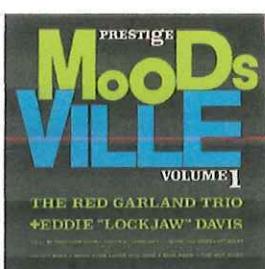
### RED GARLAND TRIO AT THE PRELUDE (PRESTIGE 2PRCD-24295-2)

RED GARLAND(p), JIMMY ROWSER(b),

CHARLES "SPECS" WRIGHT(ds) 1959年10月2日録音

BOHEMIAN BLUES

1959年10月2日ニューヨークの「ザ・プレリュード」でのライブ録音は4枚のLPレコードに分散されて発売されましたが、2000年代初頭に未発表曲を含めた2枚組のCDで完全盤として再発売されました。当夜は3ステージあり、その様子が順番に収録されています。悲しいファンの性(さが)ですが、最員の引き倒しと笑われてもピアノ・トリオのライブ盤として最高傑作と固くかたく信じています。



### THE RED GARLAND TRIO+EDDIE "LOCKJAW" DAVIS (PRESTIGE 《MOODSVILLE 1》)

RED GARLAND(p), EDDIE "LOCKJAW" DAVIS(ts),

SAM JONES(b), ART TAYLOR(ds) 1959年12月11日録音

WE' LL BE TOGETHER AGAIN

WHEN YOUR LOVER HAS GONE

エディ・ロックジョー・デイビスといえば、ご存じジョニー・グリフィンとの壮絶なテナー・バトルのレコードを沢山残してくれた強者(つわもの)であります。が、意外なことにガーランドの音楽キャリアのスタートは、このエディとの共演だったそうです。本作はPRESTIGEがムード歌謡ならぬムード・ジャズに徹して立ち上げた『MOODSVILLE』シリーズの記念すべき第1作目です。ガーランドとエディは息があった情感たっぷりなバラード演奏を披露してくれています。



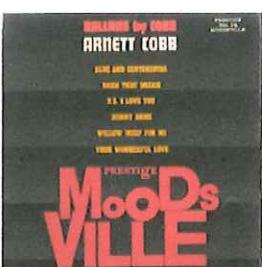
### 25 YEARS OF PRESTIGE (PRESTIGE P-24046)

RED GARLAND(p), PAUL CHAMBERS(b), ART TAYLOR(ds)

1959年12月11日録音

A PORTRAIT OF JENNIE

これも、なんでこんなレコードまで買わなければいけないかという1枚です。私の感覚だと、こんな寄せ集めのレコードなど、それこそ「この生き馬の目を抜く業界で、皆々様のお力添えをもち、お陰様で無事に25年間も過ごすことができました。感謝感激雨あられでございます」とばかりに、ご最員筋に無償でお配りするものであります。こんなと言ってはタオル屋さんに大変失礼ですが《お年賀挨拶タオル》的なレコードでも、たった1曲のために買いました。笑ってやってください。



### BALLADS BY COBB/ARNETT COBB (PRESTIGE 《MOODSVILLE14》)

ARNETT COBB(ts), RED GARRAND(p),

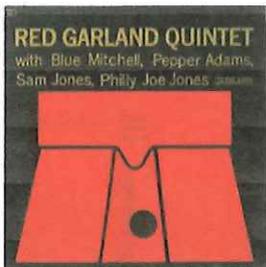
GEORGE DUVIVIER(b), J.C.HEARD(ds) 1960年11月1日録音

HURRY HOME

P. S. I LOVE YOU

真面目な話です。もしガーランド、さらにこのレコードと巡り合っていなかつたら、私は罪を犯して刑務所に入っていたかもしれません。生きてきて、様々な局面でストレスを受け

て、相手を傷つけてしまいそうになることが何度もありました。それこそチャゲ・アンド・アスカではありませんが《これから殴りに行こうかあ～ヤア！ヤア！ヤア！》という時もありました。でもその度にこのレコード聴いて気持ちを鎮めてきました。入手したときから盤質が良くなかったのですが本当に擦り切れてきて、お聴き苦しいですが、敢えて愛聴盤ですのでご容赦ください。



### RED' S GOOD GROOVE (RIVERSIDE 《JAZZLAND AM987》)

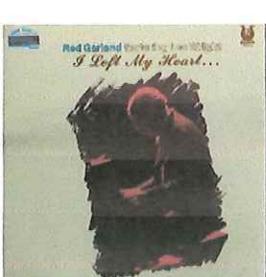
RED GARLAND(p), BLUE MITCHELL(tp),  
PEPPER ADAMS(bs), SAM JONES(b), "PHILLY" JOE JONES(ds)  
1962年3月22日録音  
TAKE ME IN YOUR ARMS  
EXCERENT!

リバーサイド・レコードのオリン・キープニューズという人に、ガーランドは生涯にわたり助けられました。まず1961年から62年にかけてクスぶっていたガーランドにレコーディングの機会を与えてくれました。この間におけるガーランドの詳しい状況はわかりません。一説によると麻薬の弊害が重度になったとか、離婚騒動のすったもんだに疲れ果てていたとか言われています。そんなガーランドにキープニューズはリバーサイドの別レーベルであるJAZZLANDに4枚のレコードを残す機会を与えてくれました。それぞれ絶妙な好盤ですが、今回はトランペットのブルー・ミッケルとゴリゴリのバリトン・サックス奏者であるペッパー・アダムスによる典型的なハードバップ演奏を選びました。さてさて、ガーランドはバリバリのホーン奏者たちと釣り合っているのでしょうか？



### GROOVIN' LIVE II AT THE KEYSTONE KORNER (ALFA JAZZ ALCR-102, 103)

RED GARLAND(p), JAMES LEARY(b), EDDIE MARSHALL(ds)  
1974年3月7日, 8日, 11日, 12日録音  
AUTUMN LEAVES



### I LEFT MY HEART . . . (MUSE MR-5311)

RED GARLAND(p), LEO WRIGHT(as),  
CHRIS AMBERGER(b), EDDIE MOORE(ds) 1978年3月録音  
BAG' S GROOVE

サンフランシスコに『キーストーン・コーナー』というジャズ・クラブがありました。1972年にオープンしてから1983年に閉店するまで、わずか11年間の営業活動でした。が、オーナーのトッド・バルカンは何故かガーランドを愛し、わざわざテキサス州ダラスからガーランドを招いてライブを行うこと、数回にわたりました。またその様子はライブ録音という形でガーランドの没後に発表されています。私の知る限りでは本LPレコード1枚とCD2枚。同じく2枚組CDが2セット発売されています。出来不出来は問いませんが、ファンとしては貴重な記録であり、中にはガーランドのピアノ・トリオによる《枯葉》も収録されています。このCDが発掘されるまでガーランドとソニー・クラークの“枯葉”は聴けないものと思っていました。

お店が幕を閉じた翌1984年にガーランドも人生の幕を閉じました。



### GALAXY ALL-STARS IN TOKYO (GALAXY GAL 9001~9002)

RED GARLAND(p), 渡辺貞夫(as), RICHARD DAVIS(b),  
ROY HAYNES(ds) 1978年7月30日

#### AUTUMN LEAVES

永く悔い多き人生ですが、その悔いの中でも最大級でベスト3に入る後悔がこのライブを聴き逃したことです。あの嵐のなかの田コロ(田園コロシアム)での伝説ライブです。当夜何があったのか全く思い出せませんが、雷におびえながらびしょ濡れにならなかつたのは事実です。

前述のオリン・キープニュースが立ち上げたギャラクシー・レコードに、盟友または麻薬仲間だったフレイバー・ジョー・ジョーンズに誘われてレコーディングしたガーランドが初来日しました。その時のライブ録音です。



### RED ALERT/RED GARLAND (GALAXY GXY-5109)

RED GARLAND(p), NAT ADDERLEY(cor),  
HAROLD LAND(ts), IRA SULLIVAN(ts),  
RON CARTER(b), FRANK BUTLER(ds)

1977年12月2日録音

#### RED ALERT

1971年から6年ぶりの録音です。勿論この間は故郷のテキサス州ダラスでクスぶっていたわけですが、ニューヨークやサンフランシスコなどの小さなジャズ・クラブで演奏はしていたようです。ですからガーランドの演奏はどうしようもないほどメロメロではありません。50年代後半の全盛期からかなり枯れてはきましたが、かなり鍵盤を押さえるタッチもしっかりしています。

ホーン陣の先発はハロルド・ランドが左のスピーカーから。ナット・アダレイのコルネットによる甘いプレイの後がaira・サリバンで右スピーカーです。

## 【最後に】

私、時々レッド・ガーランドというピアニストが本当に“死んでいる”と思えないことがあります。

何気なく家族の尻を追いながらショッピングモールを歩いているときや、ふと立ち寄ったコーヒーショップなどでBGMにさりげなく聴こえるピアノ・トリオがガーランドであることが多々あります。モンクのブルー・モンクやパウエルのウン・ポコなど聴いたことありません。またガーランド自身の演奏でなくとも影響を受けているなというプレイヤーもいます。

幻も随分見ました。このオッサン、ある日突然ノーテンキなへらへら笑いを浮かべながら登場して「やあやあ皆さん、お元気？ 今度また新譜CD出したから買ってね～。みんなの好きな枯葉やサマータイムなんかが一杯いっぱい入っているよ～ん。鍵盤コロコロするのもいつもの倍以上サービスしているからねえ。じゃあ発売記念コンサートに大勢来てね。よかったら1年に一回は来日するよ～ん。ジャパンで一回稼げば1年間は酒飲んでいられるかね～ホッホッホ」なんて調子こいでいるようだけど、なぜか憎めないんだな、これが。

虎は死して皮を残すなんていいものじゃないけれど、音楽家はレコードという記録が半永久的に残ってファンを楽しめるなんて幸せだな。

寺島さんの「男一匹とともにスピーカーに対峙するにあたわない」という一文に反発して、これまでパアパア書いてきたけれど、逆に寺島さんの意見ももっともだということも理解でききました。私もずいぶん大人になったものです。まだまだガーランドの魅力をお伝えしきれていませんが、現在の私のエネルギーが尽きました。ないと思いますがアンコールがあれば、いつかはお応えしたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。